

京都市生涯学習市民フォーラム 15周年記念シンポジウム

- 日 時 平成21年11月22日(日)午後3時～4時30分
- 場 所 京都産業会館8F「シルクホール」
- テーマ 未来につなぐ 京都の“こころ”
～精神文化の拠点都市・京都を大いに語る～

■メインパネリスト

- ・堀場 雅夫氏 [京都市生涯学習市民フォーラム会長/株式会社堀場製作所最高顧問]
- ・有馬 頼底氏 [京都仏教会理事長/臨済宗相国寺派管長]
- ・門川 大作氏 [京都市長]

■サブパネリスト

- ・西脇 悦子氏 [京都市生涯学習市民フォーラム副会長/京都市地域女性連合会会長]
- ・岡村 充泰氏 [京都流事務局(株式会社ウエダ本社)代表]
- ・柴田 知佐氏 [立命館大学4回生/京都学生人間力大賞グランプリ受賞者]
- ・湯浅 靖代氏 [食空間コーディネーター/未来の担い手・若者会議U35委員]
- ・河内 美波さん [ジュニア京都観光大使/京都市立岡崎中学校1年生]
- ・早師 万葉さん [ジュニア京都観光大使/京都市立洛南中学校1年生]
- ・飯田 哲史氏 [京都市社会教育委員会議市民公募委員]
- ・村山 千里氏 [京都市社会教育委員会議市民公募委員]

(堀場氏)

京都というまちの性格を一言で言うとなると、なかなか難しいですが、やっぱり自然・文化・文明というものが凝縮されて独特のハーモニーを生んでいる。この三つを支えている元は、「京都のこころ」だと思いますし、「京都のこころ」といえば、当然、「京都の哲学」。「京都の哲学」といえば、第一に挙げられるのは、やっぱり「宗教」だと思うのですね。

京都の存在というのは、単に京都人のための京都でなく、日本の京都であり、世界の京都である。われわれは、ものすごく大きな責任を持っていると思いますので、その辺のお考えも含めて、いろいろご意見をいただければ大変ありがたいと思います。

(門川氏)

堀場会長から話がありました山紫水明の自然、あらゆるものづくり、あるいは、大学、先端企業から伝統産業を支えているのは、この京都というまちの「地域力」であり、また「人間力」だと思います。あらゆる文化・芸術を見ても、学問研究を見ても、自然を感じても、京都の産業を見ても、その根底には、京都の精神文化あるいは宗教都市としての京都の特性があると思うんです。

そこで、一番大事なのは、京都に暮らす人間が、京都で大事にしてきた、生き方の哲学とか暮らしの美学、こういうものを大事にしていくことが、これから京都が発展し、さらに世界の京都としての役割を果たしていく根底ではないでしょうか。京都の人間が、全国標準で、あるいは、世界標準で、暮らしている、そうなったら、京都の魅力がなくなっちゃうだろうなあと感じるんですね。

やはり京都の人間が、大事にしてきたその生活の哲学・暮らしの美学を大事にしながら、更にいろんな展開・発展を求めていかなければあかんと思うのです。

(有馬氏)

京都はやはり宗教都市であると思います。神社仏閣がたくさんあります。本山と名のつきますお寺が約100ヶ寺近くございます。それぞれのお寺の御開山さんは、必ず御恩忌というのがございまして、50年に一度まいります。今進行中なのが、親鸞聖人800年。これに沢山お見えになる。

それから我々の臨済宗でありますと、毎年のように必ず御開山さまの恩忌が回ってまいります。その都度、様々な改修工事をなさる。今やっておられます、本願寺様の大改修工事はそういうことです。

私どもの塔頭も改修工事を行いました、その際、一番上の鬼瓦を降ろしますと、そこになんと慶長10年、いわゆる塔頭の建立したその年月がちゃんと書いてある。その鬼瓦に「伏見深草瓦師 寺本甚兵衛」という名前がある。なんと驚くなかれ、400年たった今日でも、我が相国寺の瓦師用達組合の方の中に、いまだに同じ寺本氏がやっておられる。400年同じ業種をずーっと続けていらっしゃる。これ京都しかないと思います。

私はやはりそういう京都の奥深さを大事にしていかなくちやいけないと思います。

(堀場氏)

京都のいろいろな文化・芸術、茶道にしても、華道にしても、能楽にしても、宗教と全部関わり合いがあるわけです。ですから、宗教というのは単にお参りするとかではなく、文化そのものを支えてきた、あるいは文化とともにあったというか、その辺を知れば知るほど存在というものが非常に大きいですし、京都の文化即宗教であり、宗教即文化であり即京都であると最近非常に思うんです。

(堀場氏)

市長は、教育委員会でも大変ご活躍された方ですが、京都の教育というものと、宗教といますか哲学との関係について、きちっと見解を出していただいて、宗教というのは、何も特定の宗教を信心するのではなしに「ものの考え方」「ありがたみ」とか「慈悲の心」とかいうものの一環であるということをもう少し明確にすべきではないかと。

(門川氏)

戦前・戦中は「国家神道」とか大変な問題がありました。反省すべきは反省しなければならない。ということで、憲法上の規定がきちっと明確にされた。そこで、私は新たな課題が出てきていると思うんです。戦後の教育では、宗教と学校教育・公教育はきちっと分けないといけない。あるいは、商売・経済活動と学校教育は分けないといけない。さらに、政治活動が学校教育に入ってはいけない、ということで、きちっと学校を「無菌状態」においた。その結果、大学の経済学部まで卒業してサラ金地獄に陥るとか、学校で民主主義や選挙が大事と教えながら、投票率がどんどん下がっている。宗教的な情操が育たない、その一方でオカルトにはまる若者が多い。私は、政治や現実の経済、社会性、生活と学校での学びが乖離していることが最大の問題であり、この乖離をきちっと融合しないといけないと思うんです。

その時に、京都の伝統で素晴らしいと思うのは、「地蔵盆」なんです。150万人が住んでいるまちで、あちこちにあるお地蔵さんにいつもキレイなお水がお供えしてあって、お花がお供えしてある。枯れているのは見たことない。多くの方が「京都は宗教都市ですね。素晴らしいですね。」とおっしゃる一つの要素です。もし、お地蔵さんや地蔵盆がなくなったら、あの雰囲気、あるいは町内のまとまりというものがどうなるんやろなど。私は、「地蔵盆」をみんなで議論して、無形文化財にしてもいいんじゃないかと。子ども中心に

町内が絆を深める。そして、ご先祖さんのことも思い、子孫のことも考えるという地域ぐるみの取組というのが、もっとも京都ならではの取組として、深めて発信できるんじゃないかと思います。

特定の宗教活動、宗教教育をしてはならないのは、当然であります。しかし、歴史や世界の状況を解ろうと思ったら、宗教が人間にどのような影響を与えていったのか、芸術にどういう影響を与えているのかを正しく知るべきであり、また決して、否定されているわけではない。だから、食べる時には「いただきます」と手をあわせる心。ほかの動物・植物の命をいただいて、「生かされ生きている」とかを認識し感謝する。そうした根底となるものは、きちっと学校教育の中でも大事にしなければならない。これを、もっとPTAも教育関係者も地域も含めて議論して、しっかりと子どもに宗教的な情操を培うことは大事と思っています。

(堀場氏)

道徳とかあるいは哲学を知らずして、子どもが大人になるのは悲劇なんです。一番かわいそうなのは本人なんです。そういう子どもを大人にした、親とか、それを教えている先生とか社会全体がもっと大きな罪を犯しているんであって、これはもう早急に変えていかなくちゃならないし、その先端に立つのは京都やと思うんです。京都が思い切ってスタートをきらないとどこもやりませんよ。その辺の区別がつけられる「知能」を持っているのは京都やと思うんです。

京都の人ってほんとに奥ゆかしいですよ。奥ゆかしいし、素晴らしいと思うんだけど、一方において、はっきり言わんということでも損していることもありましてね。京都はだいたい「知る人ぞ知る」といいますね。知ってる人はわかっているんや。でもグローバル化してきたら京都の中では通じるかもしれんけど、世界に向かっては、ええことはええ、悪いことは悪いとはっきりと話す癖をつける事が、次の時代に非常に必要だと思うんです。

宗教的に見たら、言いたいことをあんまり言うたらイカンのですか？

(有馬氏)

いえいえ、そんなことないです。(笑)私、今、いちばん力を入れているのは「核兵器廃絶」。日本が、本当に終戦という非常に厳しい、そこを乗り越えてきた。その時の反省によって、二度と戦争はすまいという誓いをたてた。それが憲法なんですよ。これは宗教者としてどうしても守りたい。

ちょっとさきほどの話に戻りますが、この間お母さんが「子どもが給食のときにいただきます、ありがとうございますと学校で言われた。おかしい。こっちは給食代出してるんや。何で感謝せなあかんのや。」と(笑)というような風潮があるんです。これは、失礼ですけど、何に感謝するんじゃなくて、自分自身が存在するそのことに感謝しなくちゃならない。そういうことがだんだん薄れているのが大きな一つの課題であると思いますね。家庭の教育というのは非常に大事だと思います。何でもない感謝の気持ちが非常に大切だと思います。そういう点が少し欠けてきたのかなあと思います。

(堀場氏)

最近になって特にそんな人がかわいそうやと思うんです。こんな人生送って、本当にそのまま死んでいったら、かわいそうですやん。感謝の気持ちを持つということは、自分が豊かになる。自分が楽しいっていうことでなかったら、文句だけ言うて死んでいったらかわいそうやからね。そやから、やっぱりちゃんと教えてあげないといけないと思うんです。

(門川氏)

京都が生んだ素晴らしい指揮者である佐渡裕さんとラグビーの平尾誠二さんの対談を聞

いたことがあるんです。「感謝力は掛け算で作用する」。素晴らしい演奏が出来た、素晴らしい試合が出来た。それは自分の力だけじゃないということで、倍の力で感謝したら、4倍の力になる。それを半分の力で、半分の感謝しかなかったら、それはもう何分の一にしかない。だから音楽でもスポーツでもあらゆることが、支えてくれた家族から、仲間から、教えてもらった先生から、そういう人の「おかげだ」という心で感謝する。たくさん感謝すれば、それは全部自分の力にはね返ってきて、またいい演奏が出来る、いい試合が出来る。という話を聞きまして、なるほどと思いました。

(堀場氏)

京都の人は、朝に感謝、夕に感謝しないといけない。京都で住んでいる事があたりまえと思っている人でも、京都から離れる、いわんや海外に行つて京都に帰つてくると「京都は何てええんやろ」と。その時は感謝するんやけど、すぐ忘れてしまう。あくる日になったら当たり前(笑)。京都に住んでいるというだけでどんなに得してます？

ところで、少子高齢化というと、年寄りがいると何か悪いみたいに言われるんです。すぐ介護保険やとかなんやらとか。僕は元気でね。そんな医者なんかにもかからしませんし。「年とったら、京都へ行こう」というようなまちにしましょうや。

(門川氏)

高齢化社会というと、どうもマイナスのイメージを持たれる方が多いんですけれども、今年1年間で100歳を迎えられる方が京都市内で319人。30年間で100倍以上になった。素晴らしいことです。これをマイナスイメージで見たらもったいない。プラスイメージで、お年寄りは最高の宝やというように皆が思わしていただいて、そしてお年寄りにどんどんあらゆるところで活躍していただく。

京都にはたくさんの「子どもの見守り隊」がおられる。毎日、毎日子どもに「おはよう」と声をかけていただいている。そういうことを、一生懸命、おばあちゃんやおじいちゃんがやって、子どもを育てようとしておられる。ほんまにね、ありがたく、最高の宝物です。

学校の放課後に、教室の中でいろいろなことを教えてもらうとか、いろいろな取組を進めています。そうすると、また、おばあちゃんやおじいちゃんも元気になってくださる。

(堀場氏)

そろそろ、サブパネリストからもご意見をお聞きしますので、これだけ言っておこうということがあったらお願いします。

(門川氏)

私が教育長のときにびっくりしたのが、京都市内に100ほどの私立幼稚園があります。仏教系が40あまり。これはよくわかります。ところがキリスト教系が20いくつあります。

大学もキリスト教系がたくさんあります。何でかと考えたら、明治維新の後も、終戦後も、キリスト教のあらゆる宗派が、やはり、精神文化の拠点都市に、意図して布教され学校も幼稚園も作られた結果かなあと。京都ではあらゆる宗教が活発で、寛容の精神で京都のまちで融合している。そういう意味でも素晴らしい。これは、多文化共生ということでもあり、いろいろな宗教的な文化も大事にさせてもらったらいいなあとと思っています。

(有馬氏)

私は、以前に、京都の高層化に反対しました。ただし、学校(大学)だけは特別措置で高くてもいいんですと声を大にして申し上げました。何故かと申しますと、やはり京都は、寺院と神社と学校で成り立っているまちなんです。

私は、昭和30年に九州のお寺から京都に修行に参りまして、もうすっかり京都人にな

りました。もう京都を離れたくないです。こんないい土地はありません。「山紫水明の処」でこれを永久に守りたいです。京都が京都であるそういう都市にしたいです。決してこれを潰していただきたくない。ご承知のように、ようやく京都に「新景観条例」というのができました。市長さんどうぞお守りいただきたく。それが世界の京都なんですよね。

(堀場氏)

京都は古都でもなければ、近代都市でもない。要するに、やっぱり1200年生きてきたということですね。これは立派で、ボンベイのような遺跡ではないし、ニューヨークでもない。やっぱり、古い歴史と伝統を持ちながら、これを持ち続けるというのは生きてきたということですね。

そして、産業も常に、いま伝統産業と言っている産業も、その時代は超近代産業なわけです。織物にしたって、焼物にしたって、染物にしたって、その当時の最新・最先端の産業であった。今も京都の産業というのは、最先端産業なんです。

ですから、やはり京都が生き続けているということであって、古いまちやからアクティビティがないわけではなく、京都が一番アクティビティが高いと思う。日本全体が京都を真似している。京都を見てたら日本がわかる。だから大事なものは、次の日本をどうしようかと思うたら、京都が動かんことには日本が動かない。

(門川氏)

精神文化の拠点都市としてがんばっていきます。

(堀場氏)

そろそろサブパネリストからご意見を伺いたいと思います。

※ サブパネリストの御意見

(西脇氏)

お三方のお話をとっても興味深く、何か私たち市民に言ってもらっているように思っています。

京都のいっぱい大事なことを、私たち先代のものが次の世代にいろんなところで話していかなければなあ、つくづく思っておりました。今、核家族化して、伝えていく機会が少なくなっておりますときに、家族の中でなかったら、地域の中でも京都の大事なことをもっともっと伝えていきたい。お盆の数珠回しにしても、それは一つの宗教と関係なく、これはあくまで、「おかげさま」とか「ありがとうございます」とか感謝の心ですということ。私たちは地域の中で、社会教育関係団体として、気のついた者が、多くの方を誘って、次の世代とつないでいくことにより、京都の文化がいつまでも続いて、町衆の力で、宗教の力で、教育の力で、そして経済的にもいろんなところで京都が発展していくと思います。私たちの年代のものも、がんばらせていただかないといけないなあと思っております。

(岡村氏)

私どもは、京都に対して問題提起をしていこうと「京都流議定書」というイベントを今年も含めて2回やりました。実は今年、堀場会長と有馬理事長さんの対談を実現したかったんです。なぜかという、私どもは、宗教とか宗派に関係なく、本当に宗教の心というものを学びたいと思ったからです。そのように思ったのは、2点理由がございます。

私は、小さな中小企業を経営しているんですが、大企業と違いまして、コストカットをしていっても中々利益というものが出ないんです。そんなことよりむしろ、社員のモチベーションや人間力を高めることをやっていくほうが効果があがるということで、日々その

社員の問題を悩んでいるんです。人の問題を悩んでいきますと、結局は、堀場会長もおっしゃったように、宗教だとか哲学だとかに行き着いて行くんですね。そこでそういうことを学びたいと思ったのが一点。

もう一点は、会社では「社員教育」というのをやっています。いい年した大人に対し「あいさつをなさい」「気配りをなさい」とか「利他の心を持ちなさい」という教育をやっています。私どもも含めまして、結局30代・40代とか、いわゆる親世代がきちっとそういう教育を受けていないことを非常に感じまして、われわれの世代の企業家、経済界・産業界も、本当に宗教の心を学んでいかないといけないなあと思ひ、この場を非常に楽しみにしてきたわけです。

最後に、お願いなんですけど、本当に宗教界の方からも、経済界のほうに是非とも関わっていただき、どんどん教えていただきたいと思ひます。また門川市長の行政サイドは、是非ともこのような宗教界と経済界がいろんな関わりを持たしていただけるような場を作っていただきたいと思ひました。

(柴田氏)

わたしは愛知県出身で、大学で京都に来たんですけど、京都に来て本当によかったなあと思ひました。

私は地雷をなくすための活動をしていて、よくカンボジアとかベトナムに訪問することが多いんですけど、そういった時に、「日本の文化ってどんなものがあるか？」という風に聞かれることがよくあるんですけど、なかなか答えられないんですね。それで自分の身を京都に置くことで、京都の文化・日本の文化を学びたいということで、京都の大学に進学することを決めました。今は留学に行かれる学生さんがいっぱいいらっしゃるんで、私のような思いを持っている学生さんというのはたくさんいらっしゃると思ひます。

大学4年生になるんですけど、大学生活を京都で過してきて、堀場先生もおっしゃってましたが、京都に住んでいるのがどんなに素晴らしいことかと肌で感じています。ますます京都が好きになりました。これからもですね、京都で文化・文明・自然を学びつつ、お寺や神社の観光もしつつ、学びを深めていけたらいいなあと思ひています。

(湯浅氏)

私は、普段はテーブルコーディネーターというお仕事をしておりまして、京都生まれ、京都市育ちということで、何か京都をもっと発信するようなことを、テーブルコーディネーターというフィルターを通して、できないかなあと思ひて活動しております。

私の中で、いろいろ調べていきますと、だんだんと「年中行事」ですとか「歳時記」それから「お節句」などが失われてきているような気がします。こういったものをちゃんとしていきましょう、ということ伝える活動をしているんですけども、私たちの世代でも知らない人も多くて、親の世代でも知らない方が多いと本当に感じます。そのような慣習を今後子どもたちに伝えていきたいと常々感じています。そのような慣習を学ぶことで、自然に感謝したり、食べ物に感謝したり出来るのではないかと思ひます。本日お三方の話をおきいて、感謝の奥底には宗教というものがあるんだといったことを改めて感じました。

今、私は、「未来の担い手若者会議 U35」というメンバーの一員として、10年先の京都市はどういう風になるべきかを議論しているんですけども、10年先に限らず、自分たちの子どもが大きくなる20年・30年先にもつながるような提案をしていきたいと思ひています。

(河内氏)

京都の文化で大切なことは、お寺とか神社もそうだと思うけれども、私は、身近にある「京ことば」が大切だなあと思いました。京ことばは、最近なくなりつつあるので、なくならないように未来につなげていきたいと思いました。

(早師氏)

今までお話をうかがって、一番強く思ったのは、京都の文化・日本の文化は、人の心で生きているもので、この今ある文化は1200年前のご先祖様たちが、少しずつ積み重ねて作りあげられたものなので、これからの1200年さらに次の1200年につなげるような努力を私たちもしていきたいと思えます。

(飯田氏)

堀場会長の言葉が身にしみتانですが、京都に住んで京都の大学でよかったなあと感じました。本当に歴史・伝統・文化の中で、学ばせてもらっている。そういう中で、自分の精神というものが磨かれている感じがします。

(村山氏)

小さいころから京都で生活している者にとっては、托鉢の僧侶の声で目を覚ましたり、地蔵盆であるとか、宗教が本当に自然に身についていると思えます。どの宗教でも、感謝の気持ちは共通の意識にありまして、ぜひ偏ったものではなく、子どもたちにそういうものは伝えていきたいと思うんです。

私自身も子どもがおりまして、いろいろな事件が起こる中で、子どものころを育てていくのが、大変かなと思えます。子どもたちのやる気がなくなったりしているのも、親の教育がなっていない。ちゃんと育てていないために子どもにそれを伝えられない世代のかなと思えました。

京都には、人材はたくさんいらっしゃると思うんです。ぜひとも、有馬管長・堀場会長にもご協力いただいて、皆さんで京都の子どもたちを是非とも育てていきたいと思えますのでよろしく願いいたします。

※ 最後一言ずつ

(有馬氏)

日本民族というのは、世界一だと私は思っています。赤ちゃんが生まれたら、お宮参りする。結婚式は教会で挙げます。で、お葬式はお寺です。こんな、柔軟性の豊かな民族は世界中どこを探してもありません。それほど、すべてを受け入れる民族なんです。

この日本民族の素晴らしい柔軟性、すべてを受け入れる。これが、日本民族として誇りうる大きな精神文化だと思います。そういう意味で皆さんは何の遠慮も要りません。お宮参りでお宮さんに行き、教会で結婚式を挙げ、葬式はお寺です。それでいいんです。ちっともまったく何の不思議もない。全くそれを受け入れるおおらかさ。私としては、すごく大事にしていきたいと思えます。

どうでなくちゃならないということはないんです。それが本当の自由人。自由ってそういうことだと私は思えます。すべて何をやっても自由でなくちゃいけません。束縛し、こだわり、執着したときに仏教では、迷いといっています。その迷いから抜け出す。仏教でいう解脱。これはすべてを許す、この寛容な精神、これを私たちはずーっと大切にしていかななくちゃならないと私は思っています。

(門川氏)

それぞれの方の短い言葉の中に深いものを感じさせていただきました。京ことばを大事にしたい。あるいは千年先のことを展望したお話、あるいは本当に素晴らしい伝統、さま

ざまの意味がある行事。そうしたものを我々の世代までは伝わってきたけど、次の世代に伝える努力をしているのかどうか？本当に共々に真剣に考えて、次の世代にきっちりと伝える取組をしなければならない。素晴らしい文化遺産・伝統・自然がある。あることと、それを認識すること。その素晴らしさを認識することと、さらにそれを子どもたちの教育に生かすこと。これは別の概念です。努力してそれらを生かし、次に伝えるということをきちっとしなければならない。何か仕組みたいなものを今やらないと、この千年を超える素晴らしいものが伝わらなくなる。

私もこの正月からずっと着物を着ているんですけども、京友禅の出荷量が最盛期の3.7%なんです。30分の1。出荷量が西陣織が12%、1割なんです。したがって、今のままでは、あと10年・20年後は職人さんが次の世代につながらない。タクシーの運転手をされながら織ってくれたはる。これが現実なんです。京ことばももう五花街でしか使われなくなってくるというようなことになるのでしょうか。標準語をみんなが使っているような京都やったらおもしろいことあらしまへんわねえ。

今日の話をお互いしゃべりっぱなし、聞きっぱなしにしないで、それぞれの手元のところで何が出来るかと考えていただいて、共に努力したいと改めて実感しました。これをやるのが素晴らしい「京都力」・京都の「人間力」やないか、こんな努力の中で、京都のまちは1200年続いてきたんやないかなあとと思っています。

(堀場氏)

お一人お一人素晴らしい発言がありました。それぞれに京都をまず愛しておられるなあと感じました。やっぱり京都を好きなんですよ。また好きでなかったら京都に住んでいる必要もないわけですから。

昨年この場でお話をさせていただいたんですが、「クオリア」っていうのは、我々が、何か感激・感動したら「グッ!」「おっ、すごい!」と思いますね。ところが、ただすごいと思って終わってしまうか、あるいは、素晴らしいと思ったらそれを受け、何か行動するか。アングロサクソンという人種は、狩猟民族ですから、「あっ、凄い!」と思ったら、すぐそれに反応するんです。日本人は、すごいと思うのは同じなだけけれども、それで終わってしまうんですね。それに対応して何か行動する。これがやっぱり大事なんですわね。ぜひ我々京都人はもっと感激・感動し、その感激・感動を何かで表現して、行動することになれば、京都のまちはもっともっと素晴らしいまちになるのではないかと思います。

私は、すべてどこに行っても京都弁です。やはり京都弁でしか表現でけへんのですよ。要するに、京都弁というのは、自分のところをそのまま言葉にあらわして、正直に表現している。これはもう文化のひとつですね。

それから、何の宗教をどう信仰するとか、信者というのではなしに、「ありがたいな」「ありがとう」、人に感謝するとか、あるいは、かわいそうな人にあったら助けてあげるとか、そういう気持ちが「宗教心」です。大事なものは、なにになに宗とか、なにになに教の信者である前に、我々京都人は、「愛する気持ち」「慈悲の気持ち」「何とかして世の中のために尽くそう」とかいう奉仕の精神を持つことが大事だと思うんです。祖先は、そうして京都のまちを1200年支えてきてくれたんですから、我々のジェネレーションが京都のまちを一段・二段レベルアップしていこうという気持ちが大事なんです。どうか皆さん方も「ああいいなあ」と思ったことを何か次の人に伝えるとか、あるいはそれをベースとして何か行動を起こすことを積極的にやっていただきたいと思っています。

私が一番好きな言葉というのは、“アラン・ケイ”という人の言葉です。この人は現在の

コンピューターのコンセプトを、いわゆるパソコンのコンセプトを考えた人です。1970年代、でかい真空管を使った今の性能の1/10もないようなコンピューターを使っていた時代に、「今世紀の末までに一人ひとりが簡単に持ち運べるコンピューターが出現する」と言ったんです。皆「何いうとんねんアイツ」と馬鹿呼ばわりされていた。それが現実に1990年代の中ほどになって、パソコンが誕生するわけです。彼は「この進歩の激しいコンピューターの世界において、20年先のことを予言した。スゴイ。」と一躍有名になるんです。マスコミが集まって「先生すごい」と。「じゃあ2020年はどんな世界になるでしょうか？」と聞いたら、「そんなもんわからへん。」と言った。京都弁で言うたんやのうて英語で言うた(笑)。「そうしたら先生、どうして1970年代に1995年のことを想像できたんですか？」

すると彼は『未来というものは予想するもんちゃう。未来というものは自ら創り上げていくもんや。』と言った。

この言葉、好きですねん。それ聞いて以来、十何年、常にそのことばを大事にしています。「この先どうなるんやろ?」「京都どうなるんやろ?」「うちの会社どうなるんやろ?」「私どないなるんやろ?」そんなもん知るかいな。あなたが、自分の未来、どういう人間になるんや、京都をどういう京都にするんや、どういう日本にするんや。これは、我々がやるものであって、誰も予想できないし、誰もやってくれないということです。

ですから、京都のこれから5年先・10年先を市長たのんまっせ。そんなこというてもできへん(笑)。京都の市民皆が市長を中心として、「こういうまちを作ろうやないか」というた時に、初めて素晴らしいまちになる。「もうあかんわ」と思ったら京都はダメになる。ですから、皆さん方は素晴らしい京都をつくろうという気持ちで、毎日毎日、行動していただきたいと思います。

この市民フォーラムは、皆さんに勇気を与え、素晴らしい京都を創っていこうというためにできたフォーラムですから、是非この次のフォーラムにもたくさんの方に来ていただいて、また素晴らしい京都を創るために、大いに語り合いたいと思います。ありがとうございました。